

ラーベの“森”について

——作品 “Else von der Tanne” を中心に——

川崎医科大学 ドイツ語学教室

進 野 和 子

(昭和50年10月31日受理)

Über Raabes “Wald”-Begriff

—Im Werke “Else von der Tanne”—

Kazuko SHINNO

Department of German, Kawasaki Medical School

Kurashiki 701-01, Japan

(Received on Oct. 31, 1975)

RESÜMEE

Wir versuchen eine Betrachtung über Raabes “Wald”-Begriff. Dabei betrachten wir hauptsächlich das Werk “Else von der Tanne” (August 1863 bis Mai 1864).

Der “Wald” ist ein Symbol. Er bedeutet eine “Natur” in dem inneren Sinn. Vielleicht können wir es für Raabes Begriff halten, dass der Wald oder die Natur eine vollkommene Ordnungswelt ist. Weil wir eine Bekenntniss in seinem Kollegeheft treffen. In diesem Nachschrift heisst es: Die Phantasie erklärt die Natur, ihr erschliesst sich die Menschenbrust, ihr wird die Welt ein durchsichtiger Kristall. Insofern können wir die Phantasie eine innere Offenbarung der Wahrheit nennen. Sie ist die freundlichste Gabe, die von oben, von Gott, kommt. Und noch heisst es: Die Phantasie hat im Schönen wesentlich ihre Heimath. —Das Studium des Lebens das beste Studium der Schönheit. Die Kunst und die Phantasie wurzelt in der Wirklichkeit. Daher dachte Raabe, Gott, Natur, Menschenleben und sein Inhalt ist vor dem Künstler hier. So Künstlers Tätigkeit ist hier Erfindung, Ausführung, Vollendung durch die Phantasie in “selbstschöpferischer” Freiheit. —“Erfindung” ist, nach Raabes Meinung, das Finden *einer neuen tiefern Bedeutung* irgend eines Inhalt (Stoff).

Raabes Bildphantasie liegt in Gestalten, die reinen Herzen sind. Diese Gestalten haben etwas Gemeisames. Es ist eine Naturempfindung. Hierherauf dürften wir die Naturempfindung den Faktor der Phantasie nennen.

Raabe will den Menschen im Zusammenhang der Dinge, wie er sagte, dass die Kunst und die Phantasie in der Wirklichkeit wurzelt. Er will nicht den Unmen-

schen oder Übermenschen, sondern den Mitmeschen.

Dennoch damals musste man in der unbehaglichen und banausischen, schwermutigen und schlechten Zeit leben. I dem Hintergrunde solcher Zeit ist die Symbolik das einzige Mittel, den Zerfall seiner Dichtung in lauter Einzelne aufzuhalten, je tiefer der Dichter in jene sogenannte "Gründerzeit" hingeworfen ist. Die Leistung der Symbolik ist gross und effektiv für sein Kunstwerk, seine Phantasie-Welt. Gewiss könnten wir den "Wald" für Raabes ideale Phantasie-Welt halten.

Noch eine andere Bedeutung enthaltet der "Wald". Es bezieht sich auf Raabes Grundbegriff von dem Wesen der Menschheit. Er denkt, das wahre Leben des Menschen ist verwoben mit Natur. Das Verhältniss zur Natur birgt eine fast religiöse Stimmung in sich. Deshalb nährt Natur einen wesentlichen, eigentlichen und menschlichen Menschen.

ラーベの"森"の概念について、作品"Else von der Tanne" (『樅の木のエルゼ』)を中心に考察を試みたい。

"森"というのはいわばシンボルであり、内面的意味における「自然」をさす。ラーベは森・自然をある完全無欠の大いなる秩序の世界とみなしていた。彼の文学で果す自然の役割について彼の大学時代の講義ノートの中にその明確な萌芽をみることができる。「Phantasie は自然の本質を明らかにし、Phantasie の前に人間の心は自ずと開き、世界は透明な水晶となる。その限りにおいて我々は Phantasie を真実の内面的啓示と名付けうる。Phantasie は天から、神からくる最も恵み深い才である。」更に、Phantasie は単なる想像力、構想力とは異なり、本質的に美に故郷をもち、その美についての探究も生について学ぶことの中にある。芸術も Phantasie も現実根差するものであり、それ故に彼は神、自然、人間の生とその内容、そういったものが、ここ芸術家の前に置かれており、芸術家の活動はそういった現実を"それ自体創造的な"のびやかな Phantasie によって着想し、練りあげ、完成させることなのであると考えた。——「着想」というのは、ラーベによれば、表面化していないある内容(素材)の新しくより深い意味を発見することであった。

実際の作品中では無垢な魂をもった人々、換言すれば自然を感受する開かれた心をもった登場人物達によって、Phantasie の世界へ引き入れられる。この登場人物達のもつ共通性、自然感受力を Phantasie のひとつの要因とみなすことは差支えないであろう。ラーベにとって創作するとは詩作すること、即ち美を芸術を形にとどめることであった。そして何よりも美と醜、詩と散文の混淆した現実の中から詩を掘り起してくることであった。このことのために美に故郷をもつ Phantasie が彼にどれほどかの武器であったであろうか。芸術や Phantasie といえども現実根差するものであると考えるラーベは人間を事物との連関の中で捉えようとし、また決して非日常的な人間(Unmensch)とかあるいは超日常的な人間(Übermensch)を対象と選ばず、我々と同じ日常的な人間(Mitmensch)を対象に求めたのである。

しかし当時の社会は居心地の悪い、俗悪で暗鬱な時代であり、いわゆる普仏戦争後の泡沫会

社氾濫時代に詩人が深く身を投じてゆけばゆくほど、大きな音をたてて粉微塵になっていかざるをえぬ彼の文学の崩壊を防ぐ唯一の手段として象徴表現があったといえるが、この象徴表現はまた彼の Phantasie-Welt にとっても大きな役割を果たした。おそらく“森”に象徴される自然を彼の理想とする Phantasie の世界とみなすことができよう。

だがいまひとつの意味を“森”は包含している。人間の本性についての彼の信条に触れるが、ラーベは人間の真の生活は自然との密接した関係の中にあると考えていた。自然との関連性それ自体の中にほとんど宗教的と呼んでもよい、ある情緒が潜んでおり、それ故、自然が真に人間的な、本来的な人間らしい人間を育くむのだと考えるラーベの人間観にも裏打ちされるのである。

I

『縦の木のエルゼ』(“Else von der Tanne”)は一八六三年八月から翌年五月にかけて完成された短篇である。この時代のドイツはゲーテが「万事が急行」の時代と呼んだ如く、古典的・人文主義的教養の時代が去って、一八三五年のニュルンベルク、フェルト間の初の鉄道開通が象徴するように新たに技術的・専門的知識の時代が進行する時代であった。この機械文明の新しい時代と、かたやドイツの強大となるを恐れる列強の圧迫、またドイツ国内自身の統一方式をめぐる内紛とに世情は混乱し、不安にみちていた。この統一問題に関してはラーベ自身も深刻な事態に直面せざるをえなかったのであるが。——シュトゥットガルト滞在中の彼は一八六六年九月十一日、「確かなことですが、私は当地の保安警察に匿名でシュヴァーベン¹⁾の治安を危険にする人物として密告されました¹⁾と、母親に手紙を書いている。というのも彼が小ドイツ方式を公言して憚らない上に、身を寄せていたヴュルテンベルクはオーストリアにくみして大ドイツ方式に加担していたからである。こうした激動する時代を背景に、また自分自身も渦中の人となりながら、真に人間らしい生き方を求め、その人間本性の美しさを自然との有機的な連関の中で生きる人々の中に見出し、それを文学の創作にあたって美とも詩ともなして読者に呈示しようと試みたのである。自然の大いなる営みに育まれた人格にこそ、かけがえない人間本性の最も美しい魂は流露するというのが彼の信念であった。その彼が政治不安と厳しい生存競争が適者生存の原則を罷り通らせ、その弱肉強食の風潮がやがて人間性を歪めていく現実を見るにつけ、失われた世界を呼び寄せる力を無垢な子供の魂の Naturempfindung 自然感受力²⁾に托して彼独自の Phantasie の世界を現出する。と同時にこのメルヒェンの世界から真に人間らしい現存在 Dasein とはと問うていくのである。

この『縦の木のエルゼ』はたしかにロマン主義的感傷を否むことはできぬが、現実を通れ、森に逃避したかにみえる人物達をなお現実との係りの中に捉えなおし、ややペシμισティッシュな結末を見させているあたりに、理想と現実の両極の緊張の上にきずかれた彼の文学の特徴をよく伝え、森といういわば自然の代名詞にして理想郷を考察するに、ひとつの好個の材料を提供するといえよう。

『樅の木のエルゼ』はあの信仰をめぐる争いと銘うって、その実列強の侵略、政治的野望以外の何物でもなかった三十年戦争という時代をその舞台とする。「人間から、世の喧噪から逃れ、自分の子を混乱と時代の罪業から救い出すために」²⁾ 森へ隠棲する一人の男とその幼い娘、そしてこの陰惨な時代がいやがうえにも募らせた敵愾心、それがやがて魔女の迷信と結びつき、いわれなく、この森へやってきた父娘を排斥していく村人達、更に両者の間に介在し、この、世を捨てた教養ある男にはよき理解と共感を、何よりも汚れない無垢の魂の輝ける娘にこの地上が未だ完全に神から見放されてはいないのだという神の啓示をみる牧師、この三者が登場する。この物語はこの作品の悲劇的終末と登場する人物達が等し並に苦しみ喘がねばならなかった苛酷な時代を暗示するかのような、荒れすよぶ冬の夜から始まる。

三〇年間続いた宗教戦争も名残りの一六四八年の十二月二四日、北ドイツのハルツ山麓の寒村の、半ば毀れかけた小さな教会の一室で今しも迫りくる夕暮どき、書き物、聖夜の説教に終日かけてきた年の頃は三七・八歳の牧師がひとり、いま書き物を前に過ぎし事どもに深い悲しみの眼差しを投げかけ、もの思いに耽っている。外では吹雪がしきりと舞い、荒狂う風は音をたてて枝をへし折り、その突風が息をつこうものなら、狼の吠声が響いてこようという悪夜、その悪天について一人の老婆が、かれこれ小一時間もそうして思いにひたる牧師の小部屋の窓をたたく。彼女は「若く美しいエルゼが死ぬよ」と、この世ならぬ、一瞬にすべてを凍りつかせてしまう冷え冷えとした声で、彼の耳に注ぎこむ。その瞬間から、彼が先程来、思いを馳せていた少女エルゼのもとへ、十二年前牧師の教区の村外れの森へやってきたエルゼ父娘の小屋へと荒天の雪の中をついて向かい、そしてエルゼの死を見定めた彼がさ迷い歩くうちにいつしか幼いエルゼにこの一帯を指さし教えたあの小高い山の道をたどり、その途中静かに白い雪の中の死を迎えるという、時間にして僅か五・六時間の経過のうちに、エルゼが森へやってきた日のこと、そしてエルゼ父娘との間に重ねられた美しい心のふれあい、無辜の子 (Kinderrein) エルゼが美しき汚れなき乙女 (Das Reine-Schöne) と成長したこと、そしてそのことのために村人達によって排斥されねばならなかったこと、更に、戦争という大きな臼の下に民衆の一人一人が苦悩し、蝕まれていかなければならなかったかが、一つ一つの断片的場景としてペルスペクティーヴェの変化のうちに緊密に構成された枠小説形式で語られる。およそラーベの小説のほとんどがそうであるように、ここでも時間の経過に従って筋を運ぶということは拒まれている。それは副題「エレントのヴァルローデに住む、神の言葉に忠実な僕、牧師フリーデマン、ロイテンバッヒャーの幸福」(Das Gluch Domini Friedemann Leutenbachers, zu Wallrode im Elend armen Dieners am Wort Gottes) が示すように、汚れなき魂をもつ少女エルゼを描くことで彼の観念、内面像に形姿を与えることの方が重要視されているからである。それがために順をおった筋運びはさほど問題とはならず、ただクリスマスの前夜、ひとりの牧師が雪の森へ出かけ、そして帰らぬ人となったという事件が枠どりとしてあるばかりである。

さて、Hermann Pongs はこの作品を、これと並行して書かれていたラーベの代表的長篇

小説『飢餓牧師』(“Der Hungerpastor”)との関連から、彼が追求していた Hungerpastor 像を他方向から描いたものと指摘しております。因みに「飢餓牧師」というのは、「飢餓」というシンボルのもとに二人の幼馴染みが歩んだそれぞれ異なる人生過程を描いた作品で、ひとりには真に人間的な、内面的理想の境地に到達したいという精神の飢餓を追わせ、Ostsee 沿岸の閑村の小教区牧師として静安なうちに勤勉と愛にみたされた生活へとみちびき、もうひとりには金と外面的な力を求めてやまぬ飢餓を、そして一応外見的成功へとみちびく。しかしこの成功の中にありながら、彼を利用する人々には蔑まれ、また逆に利用した人々からも同じく軽蔑されねばならぬという、人間的な意味において死んでしまっている人間を描く。勿論、当面の『縦の木のエルゼ』の牧師は前者の飢餓を追うものですが、『飢餓牧師』がポジティブな結末を得るとは逆に、いわば飢餓の殉教者像というネガティブな終結となっています。

ラーベを内面の問題へと駆立てやまなかった時代とはどんな有り様だったのでありましょうか。一七八九年のフランス革命に代表されるように歴史は市民階級の台頭を告げ、更にドイツ各領邦にあってはナポレオン解放戦争後、これを契機にナショナリズムと自由主義がその勢力を増大してきます。しかし保守反動の勢力の筆頭メッテルニヒはカールスバートの決議を成立させ、学生組合の解散、大学に対する厳重な監督、苛酷な検閲制度といった民主勢力の弾圧をはかり、一方にスパイ、検閲といった警察国家を、他方に見かけ上の平和という、シュトラウスのワルツにのせられた愚民政策をという二本立の政治をたくみにあやつる。だがそうしたなかにも伏流していた近代国家形成への気運は一八四八年のパリの二月革命を導火線に一気に再燃し、ナポレオン戦争後三十年の安逸を食っていた旧体制の屋台骨を大きく揺るがす。そしてフランクフルト・アム・マインで初の民主的国民議会の開催をみるに至らしめる。しかしこの議会もドイツ統一問題に関しては不毛に終り、オーストリアを含める「大ドイツ」かプロシアを中心とする「小ドイツ」かの結着はその後十七年の歳月を待たねばならなかった。プロシアとオーストリアが連合してデンマークから奪ったシュレースヴィヒ・ホルシュタインの処分をめぐる両者が交戦し、プロシアが勝利をおさめ、名実ともにドイツ連邦を解体させ、小ドイツによるドイツ帝国を誕生させるまで持越されるのである。

ラーベはこの動乱の一九世紀、一八三〇年にブラウンシュヴァイク公国領に生まれた。彼は一八四八年のあの国民議会が手をやいたシュレースヴィヒ・ホルシュタインの紛争に参加する義勇兵の移動を Sekunda の生徒として目撃するが、ベルリンでの三月革命の混乱はまだ遠くの騒動でしかありえなかった。だが一八五四年ベルリンに出るや、彼はこの都会の世相の中に勃興期にある民族特有の発展に潜む成り上り者的根性を素早く察知する。政治的動揺、産業革命以後の経済的变化(ドイツの産業革命は一八三〇年頃とみなされる)、貴族の没落といった社会制度の変貌、そうしたすべてが大きく揺れ動く中で権力と成功を求める新しい人種が俗物根性を剥出しに横行する。この混乱状況をラーベは「野砲の背後に鋤がやってき、戦場で腹を肥やした鴉共が農夫の背後で再び畦の上を飛跳ねる」⁴⁾と描写喝破する。戦争成金や厚顔無恥な輩がのさばればのさばるほど、俗悪な社会に理想主義は息をひそめ、声高い日常生活の騒音に

心の声は沈黙する。ラーベはこうして失われていく人間性を、世の片隅へと押しやられていく人間本性の美しい生き様をなんとかして彼の作品に繋ぎとめようとした。彼は人間の営為の中にでなく、さらに大きなサイクルで運行する自然の中において捉えなおすことによって人間本性の美しい姿を現代化しようとした。この点において今日の作家の絶望感、「この生は耐え難く思われる、だがもう一つの生は到達し難くみえる」といった出口なしの世界とは一時代を画する。また今日の作家の困難性、もはや言葉がその意味内容を失ない、実体なき音となった状況とも事情を異にする。今日日常生活の中で人間性という言葉をうかうかと口に登せようものなら、たちまち発言する以前には予期していなかったほどの空虚さを見返りとして受取らねばならぬ。人間の存在がそれほど希薄になってきたことの証左にはかならない。『樅の木のエルゼ』で村人達が、全て隣人も、親兄弟も、それどころか神でさえもはや信じることはできないのだと叫ぶ言葉の中なりに、今日の人間が抱えている問題、神を自ら駆逐した現代人が人間そのものを完全にあますところなく問題的なものとして直視、凝視せねばならぬという困難な問題の根本点を見出そうとすれば見出すことができるのであるが。機械文明の神話が足音高く接近しつつある時期のいわば幼い感情の爆発であったにせよ。

一九世紀の作家ラーベは自然 Natur を何物をも超絶する完全な姿にとらえ、万物の源であると考え、そこには古典主義的、調和と美の世界観の継承が仄見されるが、この失われたよき時代への憧れの中に片足をとっぴりとつつこむのである。

この超えると同時に根源へ遡源する性質をもつ自然と人間をラーベは『アブテルフェン』(“Abu Telfan”)のニコラの告白の中で「それは私が子供の全く神秘にみちた自然感受 Naturempfindung を再び手に入れ、その結果目と鼻が社会の腐敗した奴隷から真の神の王国の自由な市民となり変った時のことでした。」⁵⁾と述べている。人間は自然の中にあるとき一個の完全な存在であり得た。がしかし自然を一旦捨て去ったとき、人間は「自分自身」ではなくなり、社会や国家といった全体の中に埋没し、「社会の腐敗した奴隷」と墮す。ラーベにとって真の人間になること、完全な、自由な「自分自身」に復すること、それは実際には自然の懷に帰っていく、換言すれば自然に対して子供の感情をもって心開くという姿となってあらわれる。この傾向は真に人間らしい生活の原初の形態としての森の生活への無限の憧憬となって繰返し問題とされる。ラーベは森の生活者の姿の中に汚れなき人間本性の回帰の姿を見ているのである。

Ⅱ

それでは作品『樅の木のエルゼ』をいま少し詳しく見ていこう。

森の奥深くへ、エルゼの父親ユンラート、かつてのマグデブルク司教座聖堂附属学校の先生は度重なる戦禍に心打砕かれ、瀆神の絶望感に重く心ふたいで町を去り、弱々しく森へ向う。マグデブルクの町、そこは未だ作家としてたつ以前の若きラーベが書店の見習いとして働きながら多くの書物の間を渉猟し、悲惨な運命に耐え抜いてきた歴史的町の運命やまた聖堂、破風

のある家々のたたずまいに親しみ、古文書をひもといではその歴史に時間を過ごした町であった。その成果はコンラートの身の上にも反映する。彼は一六三五年五月十日の戦火で妻と二人の子を失ない、一番末の娘エルゼだけを連れて何千人という難民の中に投げ込まれる。この大破壊に会った都市の生残りの人々は敵がエルベ河に放りこんだ市民の遺体を森や野の動物に引渡すことなくキリスト教徒らしく葬むてくれるようにと悲痛にみちた嘆願書を河下の町々に書かねばならなかった。だが残酷な運命の魔手はその手を弛めることなく、廃墟と化し、生残った人も亡霊のようになった町をペストが追撃し、更に壊れたままの市門からは再びワロン人やクロアチエ人が獐猛に押し入り、劫掠の限りを尽す。コンラートは彼の講座の再開を試みたこともあったが、この劫掠の後四年して、一切に絶望してエルゼを「混乱や時代の罪業」からかくまうために森へ向かう。

コンラートの森は逃避の場である。ラーベは「まだましな時、まだ快適な自己からまだなおいくらか残っているものを携えて、人を孤独な場所へと駆立てるのに、どんなにたくさんのよい理由のあることなのか」⁶⁾、牧師を除いて村人達は誰も知らなかったとエンラートの立場を説明します。たしかによい理由があったのだが、逃避者のコンラートの森は痛々しく、暗く不毛である。

だがエルゼの場合は異なる。ラーベは草案の中で次のようにエルゼ像を集約的に描いている。——今この時、この暗く、荒れ狂う地上からなんとあまく優雅な像がひときわ高く浮びあがってくるのか！ 樅の木のエルゼ、最も美しき少女、樅の木のエルゼ、彼女は罪のこともこの世のことも何も知らない。樅の木のエルゼ、この戦慄すべき恐怖の砂漠の世の中の最も神聖な、純粋無垢の、愛らしい花。樅の木のエルゼ、エレントの大きな森の魂⁷⁾。(Elend ラーベは作中で地味貧弱な土地を人々はエレントと呼んだと説明しますが、本来は悲惨、不幸といった意味) このエルゼ像こそ、彼が一連の森の生活者の中の結晶した凝集像である。そこにはにもかかわらず美しい世界をめざすラーベの姿勢がうかがえる。彼はエルゼの登場を聖書の簡単、明快な調べにのせて語り始める。

それは次のようである。「九月の終りころ、森で木を拾っていた子供達が帰ってきて告げた。高い樅の木の傍に不思議なもの、一台の馬車が漆黒の馬にひかれ、荒々しい銃をもった男と狼のように大きく獐猛な四匹の犬に守られて停まっている。そして更に告げた。高い樅の木の下では火が焚かれ、その傍に一人の少女がいとも優雅に座っている。その荒々しい男がその子にスープをこしらえてやっている。」⁸⁾ ペルスペクティーヴは子供の目に移動しているが、その場合純粋に中立の立場から「いとも優雅に」と描写され、よそ者と訝しみつつも何かしら臆ろ気に彼らを超える存在としてエルゼの姿を捉えさせている。さらに守護され、かしずかれていた像がたちのぼってくる。このようにトポロジカルな表現法によって、実際に語っている事柄以上のある意味を全体の雰囲気の中に溶かしこみながら加味していくというのは、ラーベ得意の技法であるが、聖書の調子で語るといふことにいかなる意味があるのだろうか。

人間本性が最も純粋に美しい発想をみせるのは自然、神の創造さながらの森の気配、神と呼

んでも差支えないような隠された自然 *Naturgefühl* を感受することができるときであると考え、その自然感受をとりわけ子供の無垢な姿に映し出すということは既に述べ、また彼がここではエルゼの中にそれを実現しようとしたことも述べたが、エルゼは、戦争による破壊と略奪に人々の心が荒廃し、もはや信頼の心や人間らしい心を持合わせなくなった村人の間で、ひとりなおも神の言葉に耳傾け、人間の内なる声に耳澄ます男、ただ孤独に森の深奥部へ戻って行くとするこのヴァルローデの牧師に、*Seele* が存在することを、全てが意味をもって *Dasein* することを示す。いわば牧師にとってはこの無意味な世界に生きる生の慰めであり、また救い主でもあった。その救い主の到来にまこと聖書の調子はふさわしい。

牧師とエルゼの出会いも印象深く描かれる。その後偵察に出かけた村人達が戻ってきてから彼自身も樅の木のそばに行ってみた。物陰からこっそりみるというのは流儀ではない彼は一行のすぐ近くまで寄っていく。何はともあれ彼は犬を枕に眠っている少女に目を奪われた。とそのとき、「突如、夕陽が太古の樅の巨大な幹を抱きかかえるように赤い輝きを放え、その一条の光は眠る子の顔を差しした。」⁹⁾ その眩しい光に眠りからさめ、エルゼは犬たちが牧師に吠えかかっているのをみる。と、彼女は何の警戒心もなく、にこにこ彼所へ行き、可愛らしく犬達のことを叱らないでねと話しかける。

彼女を目覚めさせたのは人為を遥かに超える悠久のかなたから差し、なお太古の樅を抱きかかえて照らす夕陽である。大自然の中のひとときの営みでしかありえぬ人間がかくも雄大な自然の営みの祝福をうけて登場するということ自体の中に、ラーベがこの少女に托したところのものの大きさを窮うことができる。

先にも述べたようにこの世の人々や牧師の胸に重くのしかかっている現実の苦悩をエルゼは知らない。その彼女が暗い森の小さな沼の、満々と横たわる水に彼女の、子供の笑っている顔を映し出すことは、それは全体牧師がかつて自然の神秘にぞっと凍え逃げ出したものとは別のものであった。彼女は「動物や風や光や、その他ありとあらゆるものの言葉を理解した。」¹⁰⁾ 森は彼女の手にかかるとき、息を吹き返し、生命は軽やかに晴れやかに躍動した。いや、というよりも彼女自身気づかぬが、この無辜の子の前に自然の方からその生命の本質をやさしく語りかけたのである。そこには破壊的に、分析的に働く人為はなかった、おだやかな生みの力があつた。自然から文明へと進む人間は、これは必然の理であるが、全体的な連関を見失い、個へと寸断されていく。この小説の場合三十年戦争という非常時を背景におきその事態を一層極だたせている。それ故にこの少女の生き様は作中人物には生きることの心やさしき慰め *Lebens-trost* となり、そしてまた我々には人間の生の問題についての問いかけを御伽噺のかなたから投げかけてくる。

エルゼは森の中で、高い樅の木に保護された緑の若木のように狂暴な嵐から守られ、明るい太陽の恵を享けながら、汚れを知らず、夏の日、彼女は鳥のように歌いながら森を駆け、花の冠を編む。しかしそれは御伽噺でなく、エルゼの棲む森の一面を「信仰を巡る大戦争も帝国の地崩壊も知らぬ穏かな太陽」¹¹⁾ が照らし、地上の片隅のヴァルローデ村をも容赦なく痛めつけ

た戦禍がいかにその魔の手をこの森の隠された場所 (verborgene), ラーベはこう名づけるのだが、に対してその手を差控えようとも、エルゼが森の沼地に静かに佇み、澄ました耳に聞いたものは遠くどよめく戦いの吼声であり、戦禍に荒んでいく人々の嗟み合う声であった。この隠された場所についてはのちほど触れることにする。

理想と現実の対立は、エルゼの棲む森の隠された場所と村人との対立の中に戦争という苛酷な事態を背景に象徴的に描かれる。対立というよりもむしろ、ラーベの場合は理想主義が現実の泥靴に踏みにじられていく様という方がより適切なのであるが。彼は世の波に乗らず、自分の信念に生きる人間がいつしか畸人とされ、アウトサイダーとされていかざるをえない現実の方が問題であったのだから。

ここ『樅の木のエルゼ』でも父親コンラートはこの村で何を欲するのかという村人の問いに即座に「小屋と自由」と答える。ところが無知な村人は、彼の物理の実験器具や見たこともない数々のものを垣間み、彼らの頭にあるめざましい幻想を生む。噂に聞く、あのいまわしき魔術師という疑惑である。この疑惑は時と共に増大し、樅の木一帯を呪われた、邪魔な場所として忌避し、排斥する。エルゼ父娘は当然のことながら、アウトサイダーの宿命を背負わねばならぬ。アウトサイダーは人間社会の利害関係に関心を抱かない、いわば世界とは無縁の存在である。がしかし社会はこのような人間をその危険なファクターとみなし、不信の念を抱かざるを得ない。時としてこの物語におけるように憎悪と化し、彼らの社会を証拠だてるために、その存在を抹消する行為へと駆り立てる。

ラーベはこのアウトサイダーと社会の間の溝を、この作品と共に『虹』(“Der Regenbogen”) という短篇集に収めた短篇、『勝利のかげに』(“Im Siegeskranze”) においてもとりあげる。気高い気性がその極度の緊張のはてに、精神の暗闇へと落ちていった女性が階上の燻製室に鑑禁され、「分別もあり、協調性もある」¹²⁾快適な生活者の間では既に死者の数の中に数え入れられ、ここ、この世の市民権を手中におさめている人々の間にあってはそのことには触れずにおくという暗黙の合意が成立しているという、一見何気ない日常生活の中に潜む人間性の、もってゆきどころのない、意識されない非人間性が透徹した目で描かれていく。しかしラーベはこういった極限状況をその中に身を沈めてヒステリックにあばきたてようとはしない。いかに人間存在の本質に肉迫するものであれ、常に一步退き、彼特有のファンタジーとフモールの世界、彼のいう詩的世界へと熔融しながら、人間の心の底に流れる素朴な愛の力の救済を試みる。ラーベはこの女主人公の幼い義妹アンナにこの素朴な愛の勝利者の役を与える。

アンナは女主人公の愛が彼女に対しては僅かばかりであるが残っているのを見た大人達によって階上の小部屋と一緒に閉込められる。幼気な少女にとっては痛ましい経験であるが、この病に取憑かれた者から引き離されたのち、分別も教養もある人々の中に置かれたとき、彼女は何かしらこの人々の中で異和感を覚えずにはいられない。そんなある日、人々がドイツの勝利に湧き立ち、久々に再開された Maigang に森へ出かけて行き、家中が、町全体が空っぽになり、燦燦と降り注ぐ五月の太陽の下、完全な静寂が、そしてとりどりに咲乱れる花花とむせ

かえる樹樹の香に満たされた大自然が蘇ってきたとき、アンナにふと童話の世界が心よぎる。その時、確かに自分の名が懐かしい声によって呼ばれたと感じる。抑え難く迸り出る親しい感情は一気に階上の、あの禁忌の扉の前へ引っさらう。彼女が禁忌の扉の鍵を回したとき、世界の扉は回転し、五月のむせかえる大自然の中に踊り出た狂者は正気に戻る。かつてのように気高く優美な義姉の復活は瞬時にして死の手に譲渡されるものの、この子は大人のなし得なかったことを「私が、この私が彼女を太陽の中、春の中に、自由の中に連出すことを許されていたのだ」¹³⁾と叫び、ラーベは子供の最も純粹で素朴な心に勝利の栄冠を掲げる。人間が社会を構成したとき、爾来社会は人間にある矛盾を強要した。集団と個はぴったりと一体のものであり得よう筈はなく、集団における個の存在という古くて新しい永遠の課題をシジフォスよろしく抱えこんだのである。この両者の間の間隙を社会のアウトサイダー、子供が社会のインサイダー、理性と分別と教養に象られた大人達の隠蔽された欺瞞性の虚をつくという形で呈示する。この無分利なアンナの行為の勝利のかけに人間という存在の問題を投げかけてくる。

ラーベはこうした人間の社会に非常に簡単に生じやすい誤といったものを教育、躾といった問題と絡めて洞察の眼差しを向ける。『死体運搬車』(“Der Schudderump”)の主人公アントニー・ホイスラーの像の中にそれを窺うことができよう。トニーは隔離病院で母を失い孤児となる。暫くの間、この病院の老婆と過ごす、この老婆はトニーが高らかに得てくる子供の宝物に手を叩いて心から称賛を与える。トニーは彼女が喜んでくれるかどうかと期待と不安に胸一杯にして一目散に彼女のもとへと運ぶのである。やがて養女となってよき保護者達、殊に分別と勇敢に縁どられた騎士グロイビゲンとロココ風優美を備えたセント・トゥルインによって、文字通り優雅な Dame と成長するが、いかなる躾もトニーのこの最初の傾向を消去することはなかった。ラーベはそのトニーを幸にも母なる自然が片時もこの子を去ることはなかったと語る。

ラーベは理性・分別・躾といった教育が人間本来の生とは何かということが不問に付してなされるとき、こうした美德も往々にして人間の本性を歪め、都合によっては生ある者を死者とみなす事を容易に許す取替え可能な道具に成下がる危険性を常に孕むという事を洞察し、心に禁忌の扉を内包することを銘々が互に隠蔽し合う暗黙の了解の為の口実となり得る半面を有することを、即ち「社会の腐敗した奴隷」と墮すことを警告する。しかし再三述べてきたことであるが、ラーベは決して警告のための書を目的としたのではなかった。彼の生きた時代の困難さの中で真に人間らしい生き方を追求し、厚顔無恥な俗物が横行濶歩する都会の生活から、自然の生活、森の生活の中に蟄息している人間らしい生き方、しなやかな生命の流れに素直に生きる生き方に目を向けたのである。それは彼の文学における信条、美と醜の混淆物である現実から美を掘り起して提示すること、詩的世界を創造すること、このことこそ芸術の使命とする考えに根差すのである。

それは丁度、シュティフターが彼の芸術的信条として世界観として、呼んだところの「おだやかな法則」(Das sanfte Gesetz)に似ている。「自然詩人」から「人間形成」の作家へと成

長発展していったシュティフターは短篇集『石さまざま』(“Bunte Stein” 1853)の序文で、この「おだやかな法則」を次のように記す。「そよ吹く風、水のせせらぎ、穀物の成長、さざなみ、春の大地の芽生え、空の光、星の輝き、こういったものを私は大きいものと呼ぶ。壮大におしよせる雷雨、家々を引裂く雷光、大波を打ちあげる嵐、火を吐く山、国を埋める地震、こういったものを前述した現象よりも大きなものと呼ばない。いやむしろより小さいという。なぜなら先に述べた諸現象こそがはるかに大いなる法則のあらわれなのであるから。……この外の自然界と同様、内面の人間界も同様である。公正、簡素、克己、分別、自己の職分における活動、美の嘆賞にみたされた生活、晴やかな、悠然とした営みに結びついた全き生活、これを私は大きなものと呼ぶ。激情、すさまじい怒り、復讐欲、行動を求め、くつがえし、変革し、破壊し、興奮のあまり時には自分の生命を投げ出す燃えるような精神、こういったものをより大きいとは思わない、むしろより小さいと呼ぶ。こういった事柄は嵐や火を吐く山や地震と同様、まさしく一部分の、ある一面の産物にすぎないのだから。」¹⁴⁾

この価値の転換をラーベにも認めることができる。彼もまた巨大な破壊力に比べれば一見小さなものにすぎぬ生みの力に諸力の根源をみる。自然の万物を生育する法則、「倫理の法則」をラーベは人間存在の根本とみなした。そして我々は彼の文学に対する信条、文学は詩でなくてはならぬ、美を呈示するものでなくてはならぬという信条と彼の世界観の一致を芸術家としての彼に決定的な影響を与えた、「ヘーゲルの美学」についての大学時代の講義ノートの中に見出しうる。それには美と Phantasie の問題が記録されている。「芸術の使命はひとえに美を抽出し来るところにある。」¹⁵⁾多様な現実の諸相から、“美”を剥ぎ取ってくることの中にある。この行為の第一歩が既に美の範疇に属する。「この人間の内面活動が Phantasie である。」¹⁶⁾ではこの内面の精神の知覚活動、美を掘り起してくる活動としての Phantasie とは？ラーベは語る。「かかるものとしての Phantasie。永遠に美なるもの。その美と醜のある世界、詩と散文。——およそ人間が瞥見し感受等々するところのあらゆるものの中に美を見ることが、それがここである Phantasie 一般である、即ち美を読みとることの中にある永遠なもの。」¹⁷⁾更に「Phantasie は自然を明らかにし、Phantasie の前に人間の心は開き、世界は透明な水晶となる。その限りにおいて我々は Phantasie を真実の内面的啓示と名付けうる。Phantasie は天から、神からくる最も恵み深い才である。」¹⁸⁾ここにラーベが美も醜もある現実世界において追求した人間本性の美しき姿と彼の文学信条の一致の一端を窺うことができる。彼は樅の木のエルゼにそして多くの無垢の子供達の魂に自然感受(Naturempfindung)を托した。自然感受という Naivitat (素朴)さ、シラーの有名な論文を想起しつつ、これが詩の土壌であり、ラーベの Phantasie の世界、彼の文学の Aura を形づくるのである。

『樅の木のエルゼ』を終極へと向わせる決定的な事件、聖ヨハネの前日の描写はこの作品のクライマックスとして静かな美しさで満たされる。牧師が翌日の聖餐式を約束して辞すとき、月が森の向うにのぼってきていた。「彼が崖のところで振りかえったとき、白い月明りの中に立つ優雅な姿を見た。彼女の傍に飼い馴らされた鹿が立っているのを見た。この年の最後の小

夜啼き鳥が最時の歌をうたっていた。牧師が森を抜けたとき、村のかなたの山山に遠い稲妻が走った。その閃光が青白く光るのを見た。しかし彼はその雷鳴を聞かなかった。』¹⁹⁾

淡淡と語られる風景描写の中に象徴的に実に多くの内容が、事件の予兆が盛り込まれる。最後の小夜啼き鳥の最後の歌は夏の夕暮の美しい静寂のひとつときであると同時に、エルゼが鹿を伴に優雅に森を駆け巡る最後の時を暗示する。牧師は森を抜けたとき、即ち森を抜け現実の社会に足を踏み入れたときでなくてはならぬのだが、そのとき稲妻が遠く閃くを見る。このことはまた、同じく森を出るエルゼの運命に兆す暗い翳の前触れである。

一夜あけた聖ヨハネの日、愛らしく小鳥たちは歌い、泉はこの日のために湧き出で、陽気にあふれ出す。鹿はダンスをするかのようにエルゼ父娘の囲りを飛び跳ね、身をすり寄せしながらついて行く。しかし森はずれの最後の木立の最後の陽気なひとはねが明るい太陽の中に身を投げ出すや、彼はおびえ、全く異様な風を示す。何としてもエルゼがこの緑の木蔭を去ることを止めようとする。その彼をエルゼは優しく愛撫し聞き第けさせようとするのである。が結局父親によって力づくで追い払われねばならなかった。ラーベは、鹿は自分の言葉で語ったのだ、しかし驕った人間はその言葉を理解できなかったし、しようとしなかったのだとだけ語る。それは前夜、牧師が雷鳴を聞こうとしなかった態度と同じである。このことの答はエルゼの死の枕辺で語る牧師の言葉の中に見出せる。「我々は神の力強い御手に逆らったのです。そして夜中の偷盗のように我々のもの、この世の最後の宝、宝玉を手し、彼の目から隠しておこうとこそそそしていたのです。しかし彼は我々を見つけ出しました。我々の上に息を吹きかけ、怒りの鞭でたたいたのです。我々のものに目印を刻みつけ、もとあったところへつかみ戻したのです。』²⁰⁾つかみ戻したというのはどういうわけなのか？ラーベによれば今は罪と恥の河が勢いよく進み音をたてて流れる時代だからなのです。「主が地上を軽蔑なさり、彼の嘲笑に反キリスト者は奈落で聞き耳をたて、立ちあがり、そして彼のもの達の名を呼ぶのです。目ざめよ、目ざめよ、汝、夜の暗闇よ！ 神の光はこの世から去った！ 門の所へ行け、汝、力強き者よ。地獄の門を突きあけるために！ ——王国は我々のものだ！』²¹⁾と叫ぶ悪しき時代となったからです。ラーベはエルゼの棲む森を隠された場所と呼んだ。罪と恥の河が音をたてて流れる時代からエルゼを隠した場所であり、同時に神の審判が下った後もなお神の申し子である彼女を神の目から隠そうとした場所であったからです。しかし、それはなお一歩踏みこんでラーベの文学の問題性と関係してきます。それは教会における事件、エルゼが村人の前に倒れねばならなかった事件に象徴されるでしょうが、エルゼの姿に代表される純粋な詩的世界建設と現実の、時代の反映としての文学の使命の問題である。

教会の庭に歩を踏み入れたエルゼ父娘は、一瞬の静寂の後に湧き起ってきた魔女という罵声と怒号を浴びる。この騒動の中を教会へと導き入れた牧師に、不思議な奇蹟の一瞬が訪れる。夢遊病者のように説教壇に登った牧師が、堂内に不平と怒号が鳴り渡っているにもかかわらず、エルゼに向って説教するとき、この半ば毀れかけた教会は天国の緑の園のような景観を呈し始め、こげた天井も、破れた窓からも、裂けた壁からも緑の若木がつるを伸ばし、その風にちら

ちらと舞い、太陽は美しい斑点模様を描く。緑と太陽の生氣はむくむくと聖堂内に流れこみ、エルゼの顔は説教壇の下で太陽と同じく愛らしく輝いている。牧師はまるで森の、安心できる真っ只中にいるかのように感じる。聖餐を受ける牧師が、粗悪な錫の水差を清浄無垢な乙女の甘い唇に差し出したとき、神聖なおののきが、尽きることのない至福の感情が彼の身内をさらさらと流れる。恰も彼自身が聖餐の清浄へと変容していくかのような法悦境に浸るのである。今彼に彼の *Dasein* が内面においても充足されたのである。しかしこの異様な雰囲気村人は増増惑乱し、混乱のうちに教会からまろび出る。教会の敷居の上に立ったエルゼは村人の魔女という怒号と暴徒と化した人々の石つぶてを受けねばならなかった。そして角のとがった石を左胸にうけて、「すらりとした、神々しい姿」²²⁾で村人の前に倒れねばならなかった。

ここに描写されたエルゼ自身の *Aura* と倒れねばならなかったことの中には二つの問題が潜む。そのひとつは父親が「彼女は生きている、しかし我々が死んだのだ。だから彼女をもう二度と見ることはなくなったのだ」²³⁾という、この逆説の中でエルゼに托された *das Reine-Schöne* の永遠化、詩的世界の不滅性であり、人間の存在の本質である。「我々」とはひとり父親と牧師を指すのではなく、村人を含め *Natur* そのものの魂を理解せぬ者達、彼女の死によって告発されねばならぬもの全体、現在の我々をも含む。*das Reine-Schöne* とはあの *Natur* を *empfinden* する不灭の魂である。「我々」とは *Natur* 喪失したもの、あるいは *Naturempfindung* を失なったものを指す。

更にいまひとつは、ラーベのおかれた文学状況である。即ち *das Reine-Schöne* に象徴される *Phantasie* の文学と、それは都会を離れた森という限定された概念を必要としたのだが、やがてくる二十世紀の文学、都会の文学、アスファルト文学、根無し of 文学の遠い声を聞かざるを得なかった文学状況である。それは古典主義の調和のとれた「芸術の時代」の文学ともはや目をつむることを許さぬ現実の状況との二極に両足をかけた乖離状況である。ラーベの属するエポッヒェを文学史上、いみじくも *poetische Realismus* と呼んだ。

ラーベは“森”と現実の間の二極の緊張の上に彼の文学の世界をうちたてた。“森”と現実の間の亀裂、名伏し難い深淵の存在に、“森”から出て行くものも傷つき、“森”の外にいるものも決して幸福ではあり得なかった。それでもなおかつ、ラーベは *Naturempfindung* の、人間の心の底に流れる素朴な愛、人間の感情、*naiv* さ、いいかえれば“森”に畸人とされようが、アウトサイダーとされようが、人間本性の美しい姿を見出そうとしたのである。ここでは取りあげぬがラーベの文学の重要な要素、*フモール*と共に二極の緊張の上にこの二極を統合する彼の文学の世界、彼の *Aura* を創造することを志向したのである。この二極の対峙の問題は今後の問題であるが、彼のおかれた時代と同時にフィッシャーの有名な論文で述べられるように彼の故郷の北ドイツ気質に由来するものかもしれぬ。即ち宗教改革に代表される *naiv* さを破壊する、批判や省察の原理を北ドイツ気質とする考えである。

ラーベの“森”、*Phantasie* の *Aura* の傍に存在する、彼の通俗性や時代の風潮に鋭い反応を示す仕方の中にこの北ドイツ気質が息づいているのかもしれぬ。

〔註〕

- 1) W. Raabe: Briefe, Wilhelm Raabe, Sämtliche Werke, Ergänzungsband 2 Vandehoeck & Ruprecht, Göttingen. 1975. S. 116.
- 2) W. Raabe: Else von der Tanne, Sämtliche Werke, Hermann Klemm o.J. Bd. 6, S. 212.
- 3) a.a.O., S. 224.
- 4) W. Raabe: Im Siegeskranze, Sämtliche Werke, Hermann Klemm o. J. Bd. 6, S. 504.
- 5) Dito: Abu Telfan, Sämtliche Werke, Vandehoeck & Ruprecht, 1969. Bd. 7, S. 108.
- 6) Dito: Else von der Tanne, Sämtliche Werke, Hermann Klemm o.J. Bd. 6, S. 220.
- 7) Dito: Der Entwurf, Wilhelm Raabe, Sämtliche Werke, Vandehoeck & Ruprecht, 1974. Bd. 9, erster Teil, S. 461.
- 8) Dito: Else von der Tanne, Sämtliche Werke, Hermann Klemm o.J. Bd. 6, S. 212.
- 9) a.a.O., S. 213.
- 10) a.a.O., S. 227.
- 11) a.a.O., S. 218f.
- 12) a.a.O., S. 508.
- 13) a.a.O., S. 516.
- 14) a. Stifter: Bunte-Stein, Vorrede, Werke, S. 41-46.
- 15) K. Hoppe: Wilhelm Raabe, S. 17.
- 16) Dito: W. Raabe, S. 17.
- 17) Dito: W. Raabe, S. 17.
- 18) Dito: W. Raabe, S. 18.
- 19) W. Raabe: Else von der Tanne, Sämtliche Werke, Hermann Klemm o.J. Bd. 6, S. 229.
- 20) a.a.O., S. 244.
- 21) a.a.O., S. 244.
- 22) a.a.O., S. 235.
- 23) a.a.O., S. 242.

〔主なる参考文献〕

- W. Raabe: Wilhelm Raabes Sämtliche Werke, Hermann Klemm 版.
- W. Raabe: Wilhelm Raabe Sämtliche Werke, Braunschweiger Ausgabe, Vandehoeck & Ruprecht, Göttingen.
- F. Martini: Deutsche Literaturgeschichte, Kröner, Stuttgart, 1965.
- F. Röttger: Volk und Vaterland bei Wilhelm Raabe, Drukerei und Verlagsanstalt Heinrich Stiasnys Söhne, 1930.
- H. Oppermann: Wilhelm Raabe in Selbstzeugnisse und Bilddokumenten, Rowohlt, 1970.
- H. Pongs: Wilhelm Raabe Leben und Werke, Quelle & Meyer, Heiderberg, 1958.
- K. Hoppe: Wilhelm Raabe Beiträge zum Verständnis seiner Person und seines Werkes, Vandehoeck & Ruprecht, Göttingen, 1967.
- L. Auerbach: Die Stellung der Frau in der sittliche Weltanschauung Wilhelm Raabes, Emil Ebering, Berlin, 1927.